

二人の南子

—谷崎潤一郎「麒麟」と林語堂「子見南子」—

崔 海 燕

一 はじめに

衛の国の靈公の夫人南子と孔子との対立をテーマとした二つの作品がある。谷崎潤一郎が一九一〇（明治四十三）年十二月の「新思潮」（第二次）第四号に掲載した小説「麒麟」⁽¹⁾と、林語堂の唯一の戯曲で一九二八年十一月の「奔流」⁽²⁾第一巻六期に発表された「子見南子」である。「麒麟」と「子見南子」は、ともに中国の思想書・史書の類に記された〈子見南子〉を題材としたものであるが、谷崎と林語堂の象形した南子像には大きな違いが見られる。もちろん谷崎と林語堂という作家の個性の違いを反映したものだろうが、それ以上に、日露戦争後の一九一〇年代の日本と、封建軍閥に支配されていた一九二〇年代の中国において書かれた両作品は、それぞれの国の事情と時代の影を色濃く落とすものであった。

題材となる〈子見南子〉は『論語』や『孟子』『史記』などに記されたエピソードであるが、実際のところ、その記述は非常に簡単で、曖昧なものであり、孔子が南子に謁見した時の会話の記録などはない。とくに南子についての具体的な記述はほとんどない。南子を歴史的に研究しようとするものにとって遺憾なことであるかもしれないが、作家にとってはむしろ喜ぶべきことだったといえよう。谷崎の「麒麟」と林語堂の「子見南子」は、ともに史実に縛られることなく、それぞれの作家的想像力を十分に発揮して、じつに南子を鮮やかに生き生きと描き出している。二人の南子は両作家が渾身の力をふりしぼって作りだした女性像だったと考えられる。

両作品はともに南子と孔子との対立がテーマであるが、谷崎と林語堂の形象化した二人の南子は、明らかに孔子をうわまわって作品の中心的な存在になっている。「麒麟」と「子見南子」では、それぞれどんな南子像が描かれているのか、南子と孔子との間でどんな対立があるのか、二人の作家の女性観ないしは芸術観がどのようにあらわれているのか、それぞれどのような国の事情と時代の状況が反映されているのか、孔子との対立における二人の南子の相違に着目することで、以上のような問題を明らかにしてゆきたいと思う。

二 南子像

南子は、春秋時代にあった衛の国の靈公夫人として、『論語』や『史記』などにその名前が見られる。南子が孔子と関連する歴史事件〈子見南子〉が、「麒麟」の主な材料になっており、そのほかに

も中国古典のいくつかの記録が「麒麟」の中に取り入れられている。例えば、冒頭を飾っている「鳳兮。鳳兮。何徳之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而。已而。今之從政者殆而」の歌は、『論語』『微子』篇からの引用で、孔子が楚の国で狂人接輿に会ったとき、彼にからかわれた言葉である。老子の門弟である林類と孔子との出会いのエピソードは、『列子』『天瑞』篇から林類についての章の全文⁽³⁾を引いたものである。衛の国の將軍王孫賈が孔子のことを南子に説明する言葉は、『史記』『孔子世家』において、孔子が鄭に行く途中で弟子たちとはぐれてしまった時、鄭の人が子貢に話した内容⁽⁴⁾とほぼ一致している。孔子は前後五回にわたって衛の国に出入りしている。〈子見南子〉は五十六歳の孔子が衛の国での二度目の滞在をしているとき、すなわち魯の定公の十四年目（紀元前四九六年）の出来事である。しかし、「麒麟」では「西暦紀元前四百九十三年」と冒頭で示しているように、五十九歳の孔子が三回目の衛の国入りをした年、魯の哀公の二年目の設定になっている。谷崎が典拠とした資料を特定することはできないが、〈子見南子〉をはじめ、中国の古書に記載された語句や故事を、「麒麟」の中で自分の思う存分に取捨選択し、想像を膨らませて再構成しているといえる。

〈子見南子〉についてのもっとも詳しい記述は、司馬遷『史記』の「孔子世家」にある記載で、そこには次のようにある。

孔子は從者を衛へやって甯武子の臣下とし、これによって匡を去ることができた。去ってまもなく衛の邑の蒲（河北・長垣）を通り、一ヵ月余りのち衛に引き返し、遽伯玉の家に寄寓した。

衛の靈公の夫人に南子というものがあり、人を孔子のもとへやって、こう言わせた。「四方の君子でわが国と親しく交わるのを恥としないかたは、かならずわが小君（南子のこと）にお会いになります。わが小君はあなたに会いたいと申しておられます。」

孔子は辞退したが、やむをえず南子に謁見した。夫人は薄い葛布の帳の中にいた。孔子は門に入り、北面して稽首（頭を深く下げる礼）の礼をおこない、夫人は帳の中で再拝した。夫人の腰につけた環の佩玉の音がすがすがしかった。退出してから孔子は、「わたしは最初、謁見しないでおこうと思ったが、やむをえずお目にかかって、答礼したのです」と言ったが、子路は喜ばなかった（南子に淫行があったからである）。孔子は暫って言った。「わたしにやましいところがあれば、天はわたしを見棄てるでしょう。天はわたしを見棄てるでしょう。」

衛に来てから一ヵ月余りして、靈公は夫人と同車し、宦官雍渠を陪乗とし、孔子を後車に乗せて、市中を逍遙と遊び廻った。孔子は、「わたしはまだ徳を好むこと色を好むような人を見たことがない（筆者注：吾未見好徳如好色者也）」と言って、靈公をけがらわしいとし、衛を去って曹へ行った。この年、魯の定公が歿した。⁽⁵⁾

『史記』『孔子世家』には、孔子に会ったことと、宦官を陪乗として靈公と同車し、孔子を後車に乗せて市中を遊び廻ったことしか記載されていないが、南子は中国の歴史上淫乱な女と認識されてきた。例えば、後世の儒家による『論語』の注釈では、南子を淫蕩な王妃、不品行で、とかくの評判の

あった人、みだらな女などと評している。

「麒麟」では、南子の淫蕩奔放な妖婦ぶり、毒婦ぶりがさらに徹底している。南子は密夫をもっていて夫の霊公を愛さないが、愛さない霊公から愛されないことには我慢できないし、普通の夫が妻を愛するように愛されるだけでも納得しない。「奴隷が主に事^{つか}へるやうに、人間が神を崇^{あが}めるやうに」愛されることを要求し、さらに自分の悪口を言った男を、炮烙で顔をこぼち、頸に長枷を嵌め、耳を貫き、または霊公の心を惹いた美女の鼻をそぎ、両足をたち、鉄の鎖につなぐという残虐非道なことをしている。そして酷刑を施されている男女の群れを、「詩人の如く美しく、哲人の如く厳粛」な顔で「恍惚と眺め入」っていると描かれる。南子はまさに色香のみならず、マゾヒズムを感じさせる邪悪な存在として生々しく象形されている。

日本では一八八〇年代の自由民権運動を契機に、早く景山英子や岸田俊子などによる女性解放運動があった。谷崎の「刺青」、「麒麟」などが発表されたと同じ時期の一九一〇年代には、また「新しい女」として女性の解放と自由を主張した平塚雷鳥などによる青鞥派の運動が起こっている。この女性解放運動のさなかで、谷崎が「南子」のような時代の風潮にそぐわない、風変わりな女性像をあえて作り出したのは、人間の内奥に深く潜む官能的な欲望を見抜いていたためなのだろうか。

一方、林語堂の「子見南子」における南子はどんな人物か。南子登場の場面を描いたト書きには、「南子は出てきて錦のカーテンの後ろに着席し、その姿がかすかに見える。白い小さな顔に、うず高く黒髪を結い、額に前髪を残して両鬢を垂らし、その下に耳環を下げ、藍色の繡服をまとい、極めて華やかな美しさを備えている」と記されている。舞台上に登場する南子は容姿端麗で華美な服を身につけ、古代中国の王妃を描く類型的な表現となっている。林語堂の描く南子は、「麒麟」の南子のような全身からあふれ、人に迫っていく色気や妖艶さは持っていない。しかし彼女は、男女は隔離すべきであるとする儒教の礼法「男女有別（男女に別有り）」を無視し、大胆な行動をとったり、男女共学の「六芸研究社」の創設について弁舌をふるったりして、まわりの人を完全に圧倒する。さらに、一席の話術と一場の歌舞をもって孔子の心まで動揺させる。男女平等や個性の自由発展の主張は、始終南子の礼楽観を貫いている。「子見南子」の南子は、古代の衣装を身にまといながらも、近代的思想に目覚めて独立の人格を獲得した新しい女性であると考えられる。

三 南子と孔子との対立と衝突

1 「人間」孔子

「麒麟」も「子見南子」も孔子に始まり孔子に終わるものである。しかし両作品とも孔子を重要な役としながら、孔子その人と彼の伝道を語ることを趣旨にしたものでは決してない。いいかえれば、孔子は南子の引き立て役にすぎず、南子像を浮き彫りにするために配置された人物だと考えられる。両作品における孔子像をも見ておこう。

「麒麟」は谷崎文学で唯一孔子が描かれた作品である。少年時代に稲葉清吉先生から儒学教育を受けたり、貫輪吉五郎という漢学者の秋香塾に通って、『大学』『中庸』『論語』『孟子』などを習ったり

した谷崎であるが、「麒麟」以降、孔子について一切語っていない。やはり儒教道德の代表者孔子とは折りが合わず、官能の享受を遠ざける儒教倫理を正当としないのだろう。正当としないばかりか、自ら進んで反儒教的倫理の立場を選ぶようになったのである。

「麒麟」のなかで孔子は、旧態依然たる理性と仁徳の象徴としての聖人である。ただ、「老顔」^{いた}、「傷ましい放浪」^{うはな}、「さびた、皺唄れた声でうたつた」^{しはな}、歌の「哀れな響」^{ひびき}、「緇布の冠は埃にまびれ、狐の裘は雨風に色褪せた」^{くろぬの}、「悲しい顔」^{ほこり}、「翡翠の蓋は風に結び、車の軛からは濁つた音」^{ひすゐ}が響く^{くびき}、「陋の田舎の聖人」などと表現されている。仁徳の思想を諸侯に説く理想的人物たる聖人孔子の姿は、あまりに惨めで哀れである。今までの日本文学にはめったに見られないような孔子像である。だが、実際の孔子はこんな風だったかもしれない。あてのない流浪の旅を続けている孔子は、あちこちを訪ね歩き、一度は魯の偉い役人になったが、ただちに下野して失業の身となった。また時の権力者に軽蔑されたり百姓にまでからかわれたりした。さらに暴民に包囲されて空腹にさいなまれたこともあった。今まで看過されがちだった挫折した人間孔子が、「麒麟」では谷崎によって見出されたといえるのではないだろうか。

一方、「子見南子」の場合はどうか。魯迅は一九三五年六月の「改造」に発表した「現代支那に於ける孔子像」の中で、「五六年前に『子見南子』と云ふ脚本を上演して問題を引起した事があつた。其の脚本には孔子様が登場して聖人としては少々エロチックな間抜けな処あるを免かれないが人間としては寧ろ愛すべきよい人物であつた」と言っている。この指摘のように、林語堂は孔子を人間として作り上げている。それまで程頤や朱熹など宋の儒家を介して、孔子は完全無欠な存在として神格化されてきたが、「子見南子」における孔子は、神性を喪失している。神ではなく血と肉をもつ人間として仕上げられているのである。

林語堂は孔子の人情味に着目して孔子を見ている。『史記』にも記されているように、孔子が南子に会ったことに、子路は喜ばなかった。孔子は、「わたしにやましいところがあれば、天はわたしを見棄てるでしょう。天はわたしを見棄てるでしょう」という。孔子が南子に謁見した理由について、『論語』研究者たちは様々な解釈を競っているが、「孔子はもともと南子に謁見しないでおこうと思ったが、やむをえず意を曲げたのだ」と考える点では共通している。これに対して、林語堂は「再論孔子近情」の中で、孔子が南子に謁見したのは、人情の常であり孔子の人情味のあらわれにほかならないと語っている。

「子見南子」の孔子は人情味の持ち主だけでなく、腰が低く言葉つきや顔色から相手の心をおしはかったりするなど、官界の規則や処世術に長けた人間でもある。作品の始まりで、次のような言葉が孔子と子路の間で交わされている。

孔丘：（突然聞いた）靈公の夫人は今年おいくつだろうか。

子路：三十過ぎでしょう。これはたいしたことでもありませんが。

孔丘：うん。（顰蹙）靈公は彼女のいうことをよくお聞きになるそうだが、本当なのか。

子路：何もかも、何から何まで、彼女のいうことをよくお聞きになります。

孔丘：そういえば、夫人が権力を握っているのだろう。

子路：はい、そうです。

孔丘：彼女——夫人は話好きなのか。

子路：先生の質問は特別だと思います。彼女はかなりの話好きだといわれていますが、何か。

孔丘：（口をすぼめて）彼女は賓客の接見もするのだろうか。

（子路は顔色を変えた。蘧伯玉は大笑いした。子路は気まずそうだが、孔丘は動じない。）

以上の会話を見てわかるように、南子が会いたいと申し出る前に、孔子はすでに南子に謁見したいという考えを持っている。衛の国の寵臣弥子瑕の紹介があるし、衛の国の大夫蘧伯玉の推薦もあるから、孔子は衛の国での出仕がかなうはずであった。しかし、自分の思想が受け入れられるかどうか、政治的な抱負が衛の国で実現できるかどうか、靈公ではなく南子の手にはその鍵が握られていることが、孔子には充分わかっている。役人として立身出世の道を十二分に心得ている孔子像が浮き彫りにされているといっても過言ではない。普通の人間と同じく、孔子も豊かな感情と複雑な内面をもっており、生き生きとして喜怒哀楽やもろもろの情欲の持ち主でもある。さらに、言動が矛盾に満ちていても泰然とかまえている。それまで雲の上の存在であったような偶像としての孔子が、やっと人間界にもどってきたといった印象である。

林語堂の「子見南子」が発表された翌年の一九二九年六月に、封建軍閥によって孔子釈奠が復活され、「尊孔復古」を国粹の要にしようとする風潮の中、孔子の生れ故郷の山東曲阜の第二師範学校でこの戯曲は学生たちによって上演された。神性を喪失した人間孔子が、孔氏の宗族の目には孔子を愚弄するように映ったようである。そのため校長の宋還吾は、孔子を公然と侮辱したと孔氏の宗族に訴えられ、職務を解任されるという騒動にまで発展した。この事件をきっかけに、中国全土におよぶ学界と教育界の大論争が勃発した。林語堂には孔子を侮辱しようとする意図などまったくなかった。聖人としての偶像をうち壊して、孔子のことを血と肉を持つ人間に戻し、孔子にユーモアの特質をも見いだそうとしていたのである。

以上のように、「麒麟」における孔子も「子見南子」における孔子も、それまで陳腐化されていた神様としての聖人像から脱皮して、人間としてくっきりとした輪郭をもつ人物に象形されたといえよう。

2 南子と孔子の対立と衝突

孔子が南子との会見を避けられないように、二人の対立もいずれ避けられないものであった。「麒麟」での南子と孔子の対立は、靈公の争奪戦として設定される。靈公の奪い合いをめぐる、欲望と理性の対立、女性の肉体美と聖人の仁徳思想の衝突が展開している。この対立の中で、靈公は道德の貴いことを語る孔子から感化を受け、南子を遠ざけようとしたが、最終的には孔子から学んだ理性は

官能的な欲望に打ち勝つことができなかった。聖人の仁徳思想は南子の肉体美に勝てなかったのである。結局、孔子は

われいまだとくをこのむことゝをこのむがごとくなるものをみざるなり
「吾未見好徳如好色者也」

と言い残して、再び伝道の途にあがった。ただ、「麒麟」においては靈公を設定することで、孔子の直接的な敗北を描いてはいないのである。

「麒麟」における南子と孔子の対立は、靈公を間においてこそ発生したものであったが、「子見南子」の場合は、靈公が不在で南子と孔子が直接に対決することになる。礼楽観の対立、南子の礼と世俗の礼（周公の礼、孔子の礼でもある）との衝突である。南子の登場にともなって、物語は急速に展開していく。南子は自分のもっとも大事にしている白玉を孔子に贈呈し、白玉には文字に似た紫紋があるという。孔子がいくら探しても見つからないのを見るに見かねて、何のためらいもなく宦者に簾をあげさせ、自ら孔子のそばに近寄り、紫紋のあるところを孔子に教えた。つまり南子は出場するや否や、世俗の礼にこだわらない行動をとり、「男女有別」の礼法を重んじる聖人孔子を、驚愕の色を隠せないほど仰天させた。そればかりか、つづいて「男女有別」を否定し、「六芸研究社」の創設をくわだてたりして、男女共学など世俗の礼法に反することを主張する。さらに、孔子に対して次のようにいっている。

飲食、男女のことは人生の真義で、生命の河の尽きることのない源だと思います。（中略）男女の関係は人生の至情で、至情が動いて、はじめて詩歌が作られるようになります。詩歌が作られて、はじめて文学が生まれます。わが衛の国の詩歌を聞かれたことがありますか。（中略）その詩歌は、桑の畑で密会したり、まちの片隅で誓いあったりする、礼儀の意味などわからない士女が、至情に動かされて感じるまをを表したもののなのです。

男にとっても女にとっても、男女の関係は人生の真義だと主張したのである。孔子は礼と人生を合体させる南子の礼楽観を最初は認めなかったが、南子の雄弁に対して言葉に窮し無力感におそわれる。物語が終わりに近づくと、四人の歌女と「桑中」⁽⁶⁾を歌いながら舞い踊る南子に、孔子はうっとりと見入って、興奮と同時に恐れをも覚える。舞い終わった南子に感想を聞かれ、夢から覚めたようにつぶやく。「楽と舞がかくも素晴らしいとは思ひもよらなかった。（中略）五十六歳になってはじめて芸術とは何か、人生とは何かがわかった。そうだ。これこそ真の詩であり、真の礼、真の楽なのだ。その他の雅頌や礼讓などは、すべて無意味なものだ、虚飾だ」と、南子の礼に共感を示した。戯曲は次の会話で幕を閉じる。

子路：先生はどう思われますか。衛の国にとどまってもよろしいですか。

孔丘：（この質問に答えないで）もし私が周公を信じていないとしたら、南子を信じる。

子路：では、先生はおとどまりになるおつもりですね。

孔丘：（きっぱり）いいえ。

子路：南子が礼を知らないためですか。

孔丘：南子には南子の礼があるのだ。あなたたちには分かるはずがない。

子路：それでは、こちらにおとどまりになればいかがでしょうか。

孔丘：分からない。考える必要がある。……（考え込んでいる）もし私が南子のいうことを聞いて、南子の感化を受けて、彼女の礼、彼女の楽……男女の別がなく、すべてが解放され、自然のままに……（たちまち狂喜の色をうかべて）……ああ！（新しい世界を発見したかのごとく）……だめだ。（たちまち青ざめ暗い厳しい顔つきになり）だめだ！ 私はもう去らねば！

子路：どこへおいでになるおつもりでしょうか。

孔丘：わからない。衛の国を去るのだ。衛を去るしかない。

子路：先生はもう道をお捨てになり、天下の人々をお救いにならないのですか。

孔丘：わからない。何よりもまず自分のことを救わなければ。

子路：本当にこちらをお去りになるのですか。

孔丘：去る！ 必ず去るのだ！ そのうちに必ず去るのだ！

出仕するために南子に会った孔子ではあるが、南子に会うと衛の国から去ることを決意せざるをえなかった。人生と乖離する自分の礼楽観の虚しさに気づかされ、「南子には南子の礼があるのだ」と、人生と一体化した南子の礼楽観を理解し、共感さえも抱くようになった。しかし南子の礼を認めながらも、結局それに従うことが出来ずに衛の国を去っていくのである。

四 二つの南子像の背景

「麒麟」は、千葉俊二が「狐とマゾヒズム」⁽⁷⁾で指摘したとおり、「刺青」における「古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵」をそのまま作品化したようなものである。谷崎はここで妲己を「末喜」と誤っているが、「麒麟」は紂王の妃の妲己の心を心とするが如き南子の物語である。美しい者は強者であって、悪の中にも美を発見するという、道徳と対峙する谷崎文学に固有の美に関する理念が、この作品でも呈示され、さらに強調、明確化されている。「麒麟」の南子は谷崎の出世作「刺青」に出てきた「娘」の延長で、のちの「痴人の愛」のナオミなど谷崎文学における妖婦、悪女の元祖である。

ただし、南子は「刺青」の「娘」の後継者でありながら、完全なる後継者とはいえないのではないと思う。孔子に感化されて自分を遠ざけようとする靈公に、南子はこういつている。「妾はあなたを直ちに孔子の掌から取り戻すことが出来ます。（中略）妾は総べての男の魂を奪ふ術を得て居ます。妾はやがて彼の孔丘と云ふ聖人をも、妾の捕虜にして見せませう」と。つまり靈公だけでなく、世の中のすべての男ないし聖人孔子まで、自分の「捕虜」にしようとするのが南子の望みである。ところが、この願望は十分実現できなかった。靈公は南子に取り戻されてふたたび彼女の「捕虜」になった

が、孔子は美しい南子の絶対な威力に最初から最後まで圧倒されているとはいえ、彼女の美に靡いたり彼女の「捕虜」になったりすることはなかった。世間のすべての男を跪かせるのが南子の野望だとすれば、彼女は孔子だけは跪かせていない。「刺青」の「娘」の後継者を南子として形象化しようとしながら、そこで描かれているのは、孔子を跪かせることのできない南子である。孔子を拝跪させることができなかったのは、単に典拠の問題ではないと思う。南子の美が道德の否定としてある以上、否定される道德の体现者である孔子が彼女に拝跪してはいけぬのである。もし孔子まで南子に跪いてしまったら、彼女の美は支えを失ってしまい、美でなくなるのではないだろうか。

「子見南子」には、林語堂の封建道德に反発し女性解放を主張するスタンスが強うかがえる。南子のうちには林語堂が生涯もっとも崇拜し敬愛している女性、『浮生六記』の陳芸と『桃花扇』の李香君の面影が見出される。林語堂は自ら沈三白の『浮生六記』を英語に翻訳して世間に広めた⁽⁸⁾。沈三白の妻陳芸を「中国文学上および歴史上随一の佳人に思えてならない」と、「訳者序」のなかで賞賛している。陳芸は美人とはいえないし、特別な教育も受けていない、すぐれた詩人でもない女性である。しかし、貧乏に苦しみながら清潔で風雅な田舎の満ち足りた生活を楽しんでいる。文学を愛し自然の天性をもつ彼女のことを、林語堂は「風韻のある麗人」と語った。もう一人、秦淮河の妓女李香君のことを、林語堂は『中国＝文化と思想』⁽⁹⁾で、「彼女の政治的志操の堅固さと勇氣とは多くの男性を恥じ入らせるほどのものであり、今日の多くの革命家に較べても遙かにこれを凌ぐものであった」と高く評価する。李香君が奸佞な明の宦官魏忠賢を罵倒する台詞について、天地を振動させ鬼神を泣かせるほどで、岳飛の「満江紅」と同じく人を感動させる文章であると林語堂は述べている。さらに李香君の絵を搜し求め書斎に飾った。これを生涯でもっとも快いことと思って、李香君の絵像に自ら詩を賦して彼女に愛慕の情を寄せた。

美を愛し芸術を解して、才と情にあふれるが、世俗の礼法、道德観と対立することで不遇のまま病没した陳芸にしても、歌妓の身でありながら誓った愛のため凶暴な権力に屈しなかった李香君にしても、あるいは林語堂の小説の代表作“Moment in Peking”⁽¹⁰⁾の姚木蘭にしても、ともに感性の赴くままに「真善美」を追求し、素直に自由奔放に生きていこうとする女性たちである。「子見南子」の南子は明らかに彼女たちの仲間であって、林語堂のフェミニズム⁽¹¹⁾に基づく新しい女性像であるといわざるをえない。

さらに興味深いのは、「男女の関係は人生の至情で、至情が動いて、はじめて詩歌が作られる」というように、「子見南子」における南子が詩歌＝文学の根底に「至情」をおいていることである。男女の区別の否定も、至情を根本とするところから発する。南子と孔子の対立は、至情を基盤とし至情から発する詩歌＝文学と、礼楽として規範化された詩歌＝文学との対立とも見ることができる。つまり「子見南子」は芸術論としての側面をもっており、南子は至情を基盤とした芸術のすばらしさを、積極的に提示しているように思われる。それに比べると、「麒麟」における南子は、肉体的な「官能美」のみが強調され、林語堂のいう至情を基盤とするような美を提示することはない。

二人の南子の違いは、むろん谷崎と林語堂の個人的素質によるものでもあろうが、より大きな視点

で考えれば、異なるそれぞれの国の社会情勢と時代状況が生み出したものであるともいえる。「麒麟」が発表された一九一〇（明治四十三年）年といえば、歴史的な大事件である日韓併合と、多くの無政府主義者や社会主義者が検挙された大逆事件のあった年である。明治維新後、新政府は「欧米列強に追いつけ追い越せ」というスローガンのもとに、殖産興業・富国強兵の道をひたすらに走り、欧米列強国に比肩できる国家体制を築き上げようと猪突猛進してきた。さらに日露戦争でヨーロッパの大国ロシアをも打ち破り、日本はどうか一等国の仲間入りをしたと自負した。日韓併合と大逆事件のあった一九一〇年以後、対外的には侵略的帝国主義の立場をあらわにすると同時に、国内的には厳しい思想弾圧を行った。このような国家主義的な抑圧により、石川啄木のいう「時代閉塞の現状」が生じた。いよいよ強大化していく国家権力の支配のもとで、その必然な反動として、作家たちは現実の重圧に目を背け、自分の避難所としての、おのれ一人の文学世界に閉じこもろうとした。谷崎の場合は、南子など谷崎文学における一連の妖婦を描き出して、独自の官能的世界を繰り広げ自らの耽美退廃的な文学空間に立てこもって、妖艶な悪の華を咲かせたのである。

一方、「子見南子」の発表された一九二〇年代の中国は、軍閥による複合的・分割的な政治支配におかれ、半殖民地・半封建体制がいつそう深化した。一九二五年の五・三〇事件を契機に、各地で帝国主義に反対するゼネストが相次ぎ、半殖民地・半封建体制からの脱却をめざす民族解放運動が新たな高まりを迎えた。それより早く一九一九年の五・四運動の際には、西洋の近代思想に接した一部の先進的知識人は、中国が半殖民地・半封建体制から脱却し近代化を達成するためには、古い儒教思想を徹底的に排除しなければならないと考えた。そして西洋の近代的思想を導入して、民衆の自覚を促すことが何よりの急務であるとした。しかし、孔子は中国の過去二千余年の封建時代において、最も偉大な思想家として崇められ、忠孝節義や三従四徳など儒教の道徳規範は中国人の価値判断の基準とされてきた。さらに、辛亥革命で樹立した中華民国の実権を奪い取った袁世凱が、帝政復活のため儒教的道徳を鼓吹し、儒教を国教にしようとはかったり、全国で孔子を祭る儀式を強要したりして、国内外で尊孔復古の風潮を引き起こした。五・四運動の時期にスローガンの一つとして「打倒孔家店」というかけ声が聞こえて、孔子というこの二千年來の偶像が中国民衆の心の中で傾き始めた。しかし孔子は容易に偶像としての聖人という至高の地位から下りなかった。尊孔復古の風潮の中で、林語堂は「子見南子」を創作したのである。尊孔を通じて復古への退行を企てる封建軍閥のもくろみに憤慨し、偶像としての聖人を打ち壊して孔子を生身の人間にとり戻そうとした。

その一方、一九一九年の秋、北京大学は中国で初めて女子学生の入学を許可し、以後、各大学がこれに倣って男女共学制を導入するようになった。が、二十年代に入っても在学中の女子学生はまだ少数に限られ、良妻賢母の女子教育が政府の指導者によって提唱されていた。良妻賢母の女子教育を批判し、女子教育や貞操問題についてのさまざまな議論や、恋愛と結婚の自由、経済独立など女性解放の主張が、当時の男性知識人たちによって行われるようになってきた。このような時代の動きの中で林語堂は、「男女有別」などを無視して「男女共学」や「男女平等」を唱える新しい女性「南子」を象形し、儒家の道徳律による女性抑圧を批判している。

そのキャラクターは大きく相違するが、「麒麟」と「子見南子」における南子はともに、それぞれの国と時代との状況を反映しながら、既成道徳の否定、世俗秩序と体制への批判につながるものを提示していると思えば差し支えないだろう。

- 注(1) 「新思潮」（第二次）第三号の消息欄に、「谷崎は孔子を材料とした戯曲を書いて満天下を聳動させる意気組である」という予告が出ている。結局、この作品は小説「麒麟」として書かれたが、戯曲として構想されていたことの影響は残り、短編のわりには会話がかなり多い。会話以外の部分も描写というより、むしろ説明あるいはト書きのような印象がやや強い。
- (2) 「奔流」は一九二八年六月に魯迅と郁達夫が上海で創刊した月刊誌。一九二九年に十五期をもって廃刊になったが、左翼の機関誌として外国文学の紹介などで、中国の近代文学史に大きな足跡をのこした。
- (3) 紙幅が限られるため、中国語の記述を引用する。「林類年且百歳。底春被裘，拾遺穗於故畦，並歌並進。孔子適衛，望之於野，顧謂弟子曰，彼叟可與言者。試往訊之。子貢請行，逆之雙端，面之而歎曰，先生曾不悔乎，而行歌拾穗。林類行不留，歌不輟。子貢叩之不已。乃仰而應曰，吾何悔邪。子貢曰，先生少不勤行，長不競時，老無妻子，死期將至。亦有何樂，而拾穗行歌乎。林類笑曰，吾之所以為樂，人皆有之，而反以為憂。少不勤行，長不競時，故能壽若此。老無妻子，死期將至，故樂若此。子貢曰，壽者人之情，死者人之惡。子以死為樂，何也。林類曰，死之與生，一往一反。故死於是者，安知不生於彼。故吾知其不相若矣。吾又安知當當而求生非惑乎。亦又安知吾今之死不愈昔之生乎。子貢聞之，不喻其意。還以告夫子。夫子曰，吾知其可與言，果然。然彼得之而不尽者也。」（小林勝人訳注『列子上』一九八七年一月，岩波書店）。引用に際しては、旧字体は適宜現行の字体に改めた。
- (4) 「『東門に人がいて、その額は堯帝に似ており、その項は皋陶（舜の臣）に、その肩は子産（鄭の大夫）に似ています。しかし腰から下は、禹よりも三寸短く、その疲れたさまは、まるで喪家の狗（喪中の家の犬、一説に宿無し犬）のようでした。』」（小竹文夫・小竹武夫訳『史記4』「世家下」一九九五年十月，筑摩書房）。
- (5) 引用は小竹文夫・小竹武夫訳『史記4』「世家下」（一九九五年十月，筑摩書房）に拠った。
- (6) 「桑中」は『詩経』の「鄘風」にある、男女が桑畑の中で密会することをよむ詩。中国では伝統的に、「桑中」の詩は奔放で淫乱なものだと理解されてきた。
- (7) 『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』一九九四年六月，小沢書店。
- (8) 林語堂は一九二四年に北京（当時は北平）の樸社出版部から出された俞平伯の校点本に拠って、英訳“Six Chapters of a Floating Life”を完成した。はじめ一九三五年，上海の英文雑誌「天下月刊」に四号にわたって連載され，これに多少の改正を加えて，一九三九年に上海西風社より漢英対照本が出版された。『浮生六記』の日本語訳としては松枝茂夫訳『浮生夢のごとし』がある。松枝は序文で「私はこの英訳を参考にして教えられるところが多かった」といっている。
- (9) 原作は“My Country and My People”，一九三五年，New York, The John Day Company, Inc.。日本語訳には新居格訳『我国土・我國民』（一九三八年十二月，慶文堂書店），鋤柄治朗訳『中国＝文化と思想』（一九九九年七月，講談社）がある。
- (10) 一九三九年十一月，New York, The John Day Company, Inc.。日本語訳には鶴田知也訳『北京の日』（一九四〇年，今日の問題社），小田嶽夫等訳『北京好日』（一九四〇年，四季書房），藤原邦夫訳『北京暦日』（一九四〇年，東京明窓社），佐藤亮一訳『北京好日』（一九五〇年九月，ジブ社。一九五一年，河出書房。一九七二年十月，芙蓉書房。一九九六年五月，芙蓉書房），四竈恭子訳『悠久の北京』（一九九三年十月，東京白帝社）がある。
- (11) 念のために書き添えておけば，女性解放思想は林語堂の多様な女性観の一側面にすぎないと考えられる。例えば，林語堂は“My Country and My People”で次のようなことをも述べている。纏足とは性を象徴するもので，女性美の身体的表現である。結婚は女性にとって最良で唯一の職業である。女性の幸福は，社会的権利をどれほど享受し得るかということによって決まるのではなく，生活をともにする男性の人柄によって決まるのである。

* 本稿における「麒麟」の引用は、『谷崎潤一郎全集』第一巻（一九八一年五月、中央公論社）に拠った。引用に際しては、旧字体は適宜現行の字体に改めた。また、本稿における「子見南子」の引用は、『林語堂名著全集』第十三巻「翦拂集大荒集」（一九九四年、東北師範大学出版社）所載の「子見南子」を底本とした拙訳による。

Two Images of Nancy: Tanizaki Junichiro's *Kylin* and Lin Yutang's *Confucius Saw Nancy*

Cui Haiyan

Tanizaki Junichiro's novel *Kylin* is a fictitious work based on several historical Chinese records, including the journal entries: Confucius Saw Nancy. Lin Yutang used the same sources to create a stage drama *Confucius Saw Nancy*.

In Tanizaki's *Kylin*, Nancy emerges as an enchantress and a malicious woman of lechery. In contrast, Nancy in Lin Yutang's drama lacks this coquettish and seductive nature but rather she challenges the status quo by boldly denying differences between the sexes and advocating gender equality and thus she embodies a woman with new ideas in modern times.

In Tanizaki's literary works, Nancy is the archetype of seductive wickedness. As illustrated in the novel *Kylin*, the author holds a unique interpretation of beauty whereby toughness equates to charm, and glamour stems from vice. In Lin Yutang's work, Nancy conveys the writer's disapproval of feudal morality and his advocacy of gender equality. The distinct characteristics of Nancy in both works undoubtedly reflect the two writers' different personalities, but moreover, are the definite outcome of their respective eras and national conditions. The novel *Kylin*, was published in the 1910's just subsequent to the Russo-Japanese War, and expresses Tanizaki's rebellion against the Japanese government's psychological repression of civilians. However, Lin Yutang's drama, *Confucius Saw Nancy*, was written in semi-colonial and semi-feudal China in the 1920s when feudal warlords propagated "worshipping Confucius and returning to the past". Lin Yutang therefore portrays her as a woman with new thoughts who animadverts on Confucius's oppression of women.